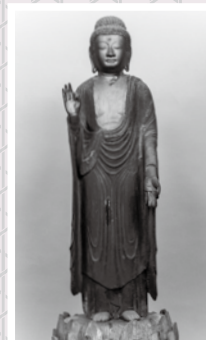




▲西方寺山門(右)と観音堂(左)
(三宅中5丁目)



▲西方寺(旧梅松院本地仏)
十一面観音立像



▲西方寺(旧豊興寺本尊)
阿弥陀如来立像



▲西方寺本尊阿弥陀如来立像

平安後期の阿弥陀如来立像二体
十一面観音立像の融通念佛宗

今秋、三宅中五丁目に建つ西方寺に祀られる三体の平安時代の古仏が市の指定有形文化財となりました。西方寺は融通念佛宗で、安養山と号します。西方寺の本山である平野(大阪市平野区)の大念佛寺が所蔵する『大念佛寺四十五代記録 井末寺帳』(延宝五年、一六七七)によると、もともとは浄土宗でした。それが、鎌倉時代末期の元亨年間(一三二一〜二四)、大念佛寺七世の法明が宗勢拡大の中で、念佛勧進道場を開いて興ったと伝わっています。

西方寺の三体の仏像を紹介します。(一)本尊の阿弥陀如来立像、(二)旧豊興寺本尊の阿弥陀如来立像、(三)旧梅松院本地仏の十一面観音立像です。

(一) 本尊阿弥陀如来立像は、十二世紀後半の平安時代後期につくられました。ヒノキ材で、一本の木で彫られた一木造です。像高は八九、四cm。面長のお顔立ちで、小さく目や鼻を表しています。体部は漆箔を施し、撫で肩で、衲衣(僧侶が身につける全身を覆う一枚の布。袈裟のこと)をまとっています。右手はひじを曲げて手のひらを胸の前にかかげ、第一、第二指を捻じ、他の指を軽く曲げて手のひらを前に向け、第一、第二

指を捻じ、他の指を伸ばす来迎印を結んでいます。両足はやや開いて、蓮華座の台座上に立っています。

本像は、融通念佛宗になる前の西方寺前身寺院の本尊であったと考えられます。聖徳太子作と伝えられており、人々に広く崇拜されています。平安時代後期は、浄土思想(現世で阿弥陀仏を心に念ずれば、来世は極楽浄土に往生できるという考え)の影響から阿弥陀如来像が各地で製作されます。本市でも、後述する豊興寺阿弥陀如来立像と共に浄土思想の広がりを示す貴重な作例です。

(二) 客仏の旧豊興寺阿弥陀如来立像も十二世紀後半から末にかけての平安時代後期につくられました。やはりヒノキ材の一木造です。

像高は六九、五cm。丸顔に小さく目や鼻を表します。体部は漆箔で、肩幅はやや大きく、衲衣をまとっています。両手は、本尊像と同じく来迎印を結んでいます。両足も、やや開いて蓮華座の台座上に立っています。本像は、もともと同じ融通念佛宗で、近くの三宅中四丁目に所在した豊興寺の本尊でした。豊興寺は、『大阪府全志』(大正十一年)によると元亨年間、法明が開いた念佛勧進道場が前身とされます。やはり前身寺院の本尊と考えられます。仏徳山と号しますが、延宝五年時には豊興寺の寺号も有していました。

豊興寺は、明治時代初期には無住になっていました。西方寺住職が兼帯したことから、明治三十年(一八九七)、同寺の廃寺とともに、本尊が西方寺に移されたのでした。現在、旧寺地には地藏堂が祀られています。

(三) 観音堂本尊(旧梅松院本地仏)十一面観音立像は、同じく十二世紀後半の平安時代後期の作です。針葉樹系材で、一木造です。像高九三、二cm。体部は漆箔に仕上げられており、ふっくらとした丸頭です。頭上に頂上化仏と頭上面をつけ、右手を下ろして手のひらを前に向け、左手はひじを曲げて水瓶をとり、岩座・反花・蓮華座などからなる台座上に足先をそろえて立っています。

本像は、屯倉神社境内に所在した神宮寺である梅松院の本地仏でした。江戸時代には、河内での西国三十三か所の札所としても知られていました。梅松院は菅應山と号する真言宗でした。明治四年(一八七二)に廃寺となり、西方寺に仏像が移され、観音堂の本尊となったのです。三宅における神仏習合(神道と仏教が融合混和したもの)を表すとともに、観音信仰を代表する貴重な古仏といえます。

なお、これら仏像の参拝については、西方寺(安岡剛史住職)か教育委員会文化財課にお問い合わせください。